

ディケンズとサツカレー

イギリス文学では十八世紀に小説というジャンルが成立し、さらに、十九世紀になると、小説が文学の主流を占めるようになり、花開いて優れた小説家が輩出された。小説の黄金時代を築いたヴィクトリア時代の作家の中でもチャールズ・ディケンズ（一八一二—一八七〇）とウイリアム・メークピース・サツカレー（一八一—一八六三）はその時代を代表する二大小説家である。この二人の作家はライバルとして、そしていつも対照的な作家として、比較されてきた。ディケンズとサツカレーの二人の生涯、作風を思いつくまに对照しながら、綴っていこうと思う。

ディケンズとサツカレーはその生まれも、受けた教育、育った環境も、対照的であるし、彼らの価値観も作品の性質も対照的である。彼らはほぼ同じ頃生まれたが、二人の境遇はかなり違ったものだった。ディケンズは一八

吉田尚子

一二年にイギリス南部のポーツマスで生まれた。父親は海軍省経理部の下級官吏であったが、経済観念に乏しく、一家はいつも苦しい生活を送っていた。父親の勤めの関係で一八一四年に一家はロンドンの南部に移り、さらに一八一七年にロンドンの南方のチャタムに行き、彼はそこで小学校に通って、比較的幸せな少年時代を過ごした。再び一八二二年にロンドンに戻ったが、その後、経済的に生活がますます苦しくなったために、彼は一二才の時、ついに靴墨工場へ働きに出され、朝から晩まで貧しい少年たちと一緒に靴墨をびんに詰め、それにレッテルを貼って、包装するという仕事をした。本の好きだった彼は将来、勉強して立派な紳士になる夢を抱いていたが、その夢が破れ、下層階級の少年たちに囲まれて、働くことに大きな屈辱を感じた。この惨めな思いのために彼は大作家としての地位を築いた後でさえも、心の傷は一生消

えなかった。まもなく、父親は借財不払いのために、マーシャルシーの債務監獄に入れられた。チャールズ以外の家族は監獄に入り、彼だけが外に下宿して、工場に通い、夕食のときはマーシャルシーで家族とともに過ごした。当時の債務監獄は家族が自由に出入りすることが出来たのである。三ヶ月ほどして、債権者との間に示談が成立したために、一家は監獄から出て、ディケンズも働くのをやめた。しかし、母親はそれでもまだ、彼を働かすことには反対ではなかったので、父親のみならず、母親に対しても不信感が募り、それがいつまでも消えなかった。彼に両親はいても、精神的には孤児と同じ気持ちであったのだろう。彼の作品に親のいない孤児の主人公が多く登場するのは少年時代のそのような体験からだったのである。この靴墨工場で働いたのはわずか数ヶ月だったが、将来それが彼のトラウマとなって残り、代表作である『ディビッド・コパーフィールド』の中で、彼はこの苦い経験を描いている。工場をやめた後、学校に二年ほど通ったが、家計は改善されなかった。彼は十五歳のとき、弁護士事務所の書記として、雇われ、一年半ぐらい勤めた。その間に、速記を習った父親の影響で独力で速記をマスターし、民法博士会での裁判を報告したりし、十九才のときには議会の速記をするまでに上達し

た。有能な速記者として評判になり、やがて彼は新聞社に勤めるようになって、ジャーナリストとしての道を歩み始めた。その合間に彼はロンドンの町を歩き回ったり、大英博物館で読書したり、作家となるための土壌がこの時に蓄積された。こうして彼は最初、弁護士事務所の書記、裁判所の記者、そして議会の報道記者、新聞社の通信員として働き、国の司法と立法の機関の裏と表を知りつくし、貧富の差が拡大する社会や政治に対して、批判的な目で見えるようになった。彼は議会や政治的集会の模様を事実通りに忠実に伝えるだけでは満足せずに、折りに触れて彼が目にした民衆たちの生活に対して感じた印象もその中に織り交ぜた。そこに彼の単にジャーナリストで終わらない作家としての資質があった。彼が速記者をやめたのは一八三八年に『ピクウィック・ペーパーズ』が出版されるとそれが売れて、作家としての地位が固まった時だった。

彼は速記記者の頃、知り合いになった初恋の女性とは身分の違いから結婚できず、結局、彼の勤めていた雑誌社の編集者の娘と結婚した。しかし、妻とはしっくりいかず、むしろ妻の妹たちの方に心を寄せた。結婚して十人の子どもが生まれたが、彼は二十二年の結婚生活に終止符を打ち、妻と別居した。最近の研究でわかったこと

は、その別居の直接の原因は十八才の若い女優とのスキャンダルがあったと考えられている。彼は作家として大成功し、揺るがぬ地位を築いたが、家庭生活においては決して幸せな人生ではなかった。

一方、サッカレーは一八一一年にインドのカルカッタでインドの税務官の子として、裕福な家庭の一人息子として生まれた。しかし、彼が生まれる前に小説の中で起こるようなまったく不思議なことが彼の両親に起こったのである。つまり、彼の父は初めて会った将校が気に入り、妻のかつての恋人とはつゆ知らず、その将校を家に連れてきたのだった。母とその将校はかつて、イギリスで知り合い、恋に落ちたが、彼女の親たちは相手が気に入らず、彼は死んだと彼女に言っていたのだった。その後、彼女はインドに送られ、親の勧める相手と結婚した間もない頃、その将校が現れたのだった。その将校と母は思わぬ再会に驚いた。その後、彼の父はサッカレーが四才のときに亡くなり、母はそれからまもなくその将校とカルカッタで再婚した。サッカレーは五才のとき、先にイギリスに帰され、しばらく親戚に預けられて、三年半ほど、母と離れて生活した。彼はイギリスの私立の学校に入ったが、学校になじめず、あまり楽しい学校生活を送ることができなかった。それでも、この頃彼は文学

書を濫読したり、絵を書いたりすることに楽しみを覚え、将来の作家としての素養が養われた。やがて、彼はケンブリッジ大学に入学するが、遊びや賭博に耽けて、学業をおろそかにしてしまい、結局、学科試験に通る見込みがなく、途中で大学をやめてしまった。その後、彼はロンドンに出て、法律の勉強を始めるが、それも長続きせず、ロンドンの街をぶらつき、遊びまわった。彼もディケンズと同じように、ロンドンの街をぶらついてその路地裏まで知りつくし、多くのことを見聞したが、ここでも二人ともジャーナリストとしての芽が生まれた。もっとも、そのときの二人の境遇はあまりにも違っていて、ディケンズは生活に追われて働きながらであったが、サッカレーはお金をふんだんに使って遊び放題に遊んでいたのだ。

サッカレーは小さい時から絵を書くことが好きで自分でその才能があると思っていたので、一八三三年に彼は絵の修業を思い立ち、パリに行く。そこで絵の勉強をし、しばらくするが、ついに自分には才能のないことを自覚し、画家になることをあきらめた。ただ、彼はパリで、出会った女性と一八三六年に結婚をすることになり、継父が創刊した新聞社のバリ通信員として仕事をした。しかし、その新聞社の経営が難しくなり、新聞が休刊されると、

彼はイギリスに帰り、雑誌や新聞に投稿して、それによって得た原稿料で生計を立てた。この頃、継父は多額の金を損失してしまい、経済的に破綻したので、今まで親に頼っていた彼は妻子を養うために自分でお金を稼がなければならなかった。美術や文学の批評や短編小説を生活のために書きまくっているうちに、彼の大胆で新味あふれる作風が読者に受け、次第に世に名前が出てくるようになった。一八四六年には創刊されて間もない雑誌『パンチ』に『俗物誌』を連載し始めた。そして、一八四七年から一八四八年に分冊として出した『虚栄の市』が評判となり、この作品によって彼の作家としての地位が確立した。しかし、私生活の面では妻が三回目のお産をした後、精神に異常をきたすという不幸な出来事が起こり、彼は妻をあちらこちらに連れて行って、色々な治療を試みたが、結局、一生、彼女はもとは戻らなかった。彼は娘二人を両親に預け、孤獨な「独身生活」をロンドンの家で送ることになった。昼間は自宅で仕事をし、夕方になると、出かけて、友人の家やクラブで夕食をとる彼の姿が見られた。その頃、彼はケンブリッジ時代の友人の妻に心惹かれ、親しく交際するが、それが原因となって、その友人から絶交されるという悲しいことがあり、彼もディケンズと同様、生涯、家庭生活に恵ま

れなかった。彼の妻は精神がもとに戻らぬまま、人に預けられたままで、彼の死後三十年以上も生き長らえたのである。

ディケンズはまともな教育を受けられなかったが、彼の血のにじむような努力によって、下層階級からたたき上げてイギリスの代表的な作家までにのし上がった人だったが、それと対照的にサッカレーは裕福な家庭に育ち、ケンブリッジ大学に行ったが、彼の怠惰な性格のために途中で大学をやめたような人だった。二人の作家の生まれ育った階級はまったく、異なったために、二人が作品で扱う登場人物たちなどの対象もおのずと異なっていた。

ディケンズは『ピクウィック・ペーパーズ』で作家としての地位を築いた後、『オリヴァー・トウィスト』、『クリスマス・キャロル』、『ディビッド・コパーフィールド』、『二都物語』『大いなる遺産』など、数々の傑作を書き、彼の書く作品はほとんどすべて、ヒットした。『オリヴァー・トウィスト』では孤児のオリヴァーが入っていた養育院のひどい実態と救貧法の問題点を社会に提示した。彼の代表作である『ディビッド・コパーフィールド』は中流階級の生まれであったディビッドが母親の死後、継父の父親によって工場で働かされ、一時、下

層階級に身を落とすが、大叔母に助けられ、教育を受けて、作家になるというように、ディケンズの半自伝的な小説である。また、『大いなる遺産』では主人公のピップは姉と鍛冶屋の義兄に育てられるが、小さい頃、脱走犯を助けることで、彼の人生がまったく、予想しなかった方向に行く。彼は謎の見知らぬ人から多額の遺産をもたらって、紳士になる修行のためにロンドンに出て虚飾の生活をするが、結局、彼は遺産をすべて失い、本当の幸福とは何かを知る。

正規の教育はほとんど受けることができず、下層階級の生活を味わったディケンズは貧しく、虐げられている階級の人々に対する共感を作品の中に強く押し出している。イギリスの国は世界に先駆けて産業が飛躍的に発展して、大英帝国として世界を制覇していくが、その一方で、国内の現実の社会は貧富の差がますます拡大していった不平等な社会だった。庶民階級からのし上がったディケンズはそのような社会に疑問を感じ、社会問題を小説の中に取り入れ、庶民の苦しみ、悲しみを描いて、読者に涙と共に笑いをも起こして、人々の共感を得た。彼は虐げられている弱者である貧しい人々に同情を抱き、社会に対する怒りを作品に込めたが、しかし、基本的には人間の善意を信じ、社会は改良できると思っていた楽

観主義的な考えの人だった。事実、彼が作品の中で貧者の苦しみ、社会の矛盾を描いたことで、社会の機構において改善されたものもあった。しかし、彼は政治的運動とは距離を置き、当時起こったチャーティスト運動などにはあまり関心を示さなかった。総体的に彼の前期の作品は明るく、ハッピー・エンドで終わるものが多いが、後期になるにしたがつて、暗さが増していく。しかし、初期の作品でさえも非常に明るい部分と暗い部分が入り混じっていた。彼のユーモアは底抜けに明るく、心の底から人々に笑いを起こすが、暗い部分はまた非常に暗く、その落差が大きい。特に晩年になると、ディケンズが書いた作品とは思われないほどに陰鬱な雰囲気漂っている。それは彼が初め思っていたように社会がならないことが段々とわかってきたことに加えて、晩年になると個人的な私的な面でも心を悩ますことが多くあったからであろう。

社会の上層部の出身であるサツカレーが作品の中で主に描いたのは中流、上流階級の人々で、当時のゆがんだ金銭崇拜の社会が生み出した俗物たちを皮肉な目で、痛烈な風刺をした。彼は『俗物誌』の中で、目覚ましい経済力によって、急成長した新興市民階級たちの軽薄な俗物ぶり、そして彼らを利用しようとする貴族階級たちの

浅ましきなど、愚かな人間社会を滑稽に風刺した。彼の代表作の『虚栄の市』では金持ちのおとなしい娘のアミーリアと貧乏画家の娘で、孤児だが美人で、活発なベッキーの二人の女友達が繰り広げる人生を平行させて、対照的に描いている。学校を出た後、彼女たちはそれぞれ的人生を歩むが、二人の社会的地位は逆転し、アミーリアは親の破産で下層階級に転落し、ベッキーは貴族の息子と結婚して、出世街道を走っていく。結局、アミーリアは彼女を長年慕っていた戦死した夫の友だちと結婚し、ベッキーの方は未亡人になるが、二人とも最後は同じような中流上層階級の身分に納まる。しかし、美貌と才気を武器にして、多くの男たちを魅了し、上流階級にのし上がっていくベッキーに私たち読者は彼女が悪人だと知りながら、その見事さに思わず、たまらない魅力を感じるのである。サツカレーはディケンズと違って、社会を改良できるとは信じていなかったし、また上流階級出身の彼はその必要もまた、なかったのである。彼が俗物たちを風刺するとき、彼自身をも風刺の対象としたし、実際、彼がぐうたらな上流階級の子息を描くときにはとりわけ筆が冴えていた。彼らの生まれの違ひから社会意識も異なったが、それぞれ異なる視点から当時のヴィクトリア社会を批判したのである。

しかし、社会意識は異なっても二人とも、ジャーナリズムの出身である。彼らは初めは新聞、雑誌などの記者となり、そして、随筆、批評などを投稿しているうちに小説家としての道を歩んでいった。そもそも小説は新聞、雑誌などのジャーナリズムから生まれたのであり、この二人の経歴を考えるとジャーナリズムから発した小説の誕生への道を彼ら二人がまさにそのままどっているのは、感慨深い。十八世紀に小説というジャンルがいち早く、イギリスで生まれたのはこの世紀に産業革命が世界に先駆けてイギリスで起こったことと無縁ではない。産業革命を契機とした科学や産業の発達によってイギリスの経済が飛躍的に発展したため、封建制度が崩壊し、産業の担い手である新興市民階級が経済力を基盤として、台頭してきた。彼らの経済力が大きくなると、社会における彼らの発言力も強まり、貴族階級に代わって彼らが文学者の主要なパトロンとなって、現実の生活をありのままに描く市民社会のための新しい文学を求めるようになった。市民階級である彼らが要望した文学はこれまでの文学の主流だった詩ではなく、庶民が気楽に読める散文だった。この要望に答えて十八世紀の初めにはジャーナリズムが発達し、ジャーナリズムによって養われた文学的土壤から小説というまったく新しい文学のジャンル

が生まれたのである。

ヴィクトリア時代を代表する作家であるディケンズとサッカーの二人の実生活での関係をたどると興味深い。当時の小説には挿絵を入れることが流行していたが、映画やテレビのない当時の人々は挿絵による視覚的イメージの助けによって、物語を楽しんだのである。一八四一年に創刊された雑誌の『パンチ』は戯画化されて、誇張して描かれた漫画の挿絵と文によって、当時の政治、社会を面白おかしく鋭く風刺した。サッカー自身も絵が好きだったことから、『虚栄の市』には自分の挿絵をつけた程だった。ディケンズも自分では絵を描かなかったが、お抱えの挿絵画家がいた。書く小説がほとんどヒットして作家として恵まれていたディケンズに比べ、サッカーの方は作家としての道がそれほど平坦ではなかった。二人が初めて会ったのは一八三六年で、ディケンズが『ピクウィック・ペーパーズ』の挿絵画家を探していた時、サッカーが自分の絵を持って、応募者の一人として、ディケンズの門を叩いた時のことであった。『ピクウィック・ペーパーズ』の挿絵を描いていたシーモ어가自殺し、その代わりの画家をディケンズが探していたのだが、結局、彼はサッカーの絵が気に入らず、フィズを採用することに決めたのだった。ディケンズとサッ

カレーの初めての出会い方はこのような文学の時代にふさわしいものであり、また、将来、彼らが二大作家としてライバルになることを考えると何か因縁めいたものを感じざるを得ない。ディケンズは『ピクウィック・ペーパーズ』によって作家としての地位を確立することになり、一方、その後、サッカーは画家になることをあきらめ、ディケンズと同様に作家としての道を歩むことになった。

親しい関係とは言えなかったにしても、二人が初めて出会って十年ぐらいはお互いに好意を示していた。ディケンズのサッカーの作品に対する批評はほとんどないが、サッカーのディケンズに対する批評は比較的多く書かれている。サッカーはディケンズの作品をよく読み、彼の話の中でも、印刷物においても心からディケンズの才能を讃えたほどであり、ディケンズも彼に対して好意的であった。しかし、彼らはお互いに思うところがあったようである。サッカーの心の底には「ディケンズは紳士でない」という気持ちがあったし、また、ディケンズの方では作家という職業を彼の天職として誇りにしていたが、サッカーは作家として真面目さに欠けていると思っていたようである。それにもろろん、小説の手法についても意見の相違があった。二人は小説がいかに

に現実をありのままに写し出すことが出来るかということにこだわっていた。スタンダールが『赤と黒』で「小説とは道路に沿って持ち運ばれる鏡である」と言っているようにそもそも小説の主眼は現実をいかにありのままに描くかということである。ディケンズもサッカレーも作品の中にリアリティを出すことに心を砕いていたが、ただ、その手法が異なっていて、彼らはお互いの手法に異議を持っていたようである。ディケンズはサッカレーの書く皮肉な風刺や滑稽さ、おかしさは真実を表わしていないとして嫌っていたし、サッカレーの方はディケンズの現実には見られないような空想的な人物の描き方は自然に忠実でないと思っていた。しかし、ともかくも一八四七年から一八四八年にかけて出た『虚栄の市』の成功までは二人の間でのおおびらかな衝突はなかった。ところが、サッカレーが『虚栄の市』の成功によってディケンズと並ぶ作家として社会から受け止められるようになる、二人の関係は以前とは少し異なり、対抗意識がお互に生じて、ぎくしゃくした関係になった。しかし、ともかくはその二人の関係は何とか持続されていたが、一八五八年にエドモンド・イエイツが自分の主宰する雑誌にサッカレーを中傷する記事を書いたことから、二人の関係は決定的に壊れる。サッカレーがイエイツに謝罪

を求めると、ディケンズがイエイツに味方したからである。これ以後、ディケンズとサッカレーは絶交状態が続いた。後に、サッカレーはディケンズの次女のケイトに頼まれて、ディケンズと和解しようとした。一八六三年の五月に彼はクラブでディケンズに会ったとき、彼の方から手を差し出し、話をしたが、その二人の関係は以前と同じようには戻らなかったにしても、少なくともそれまで持っていた敵意は薄らいだ。しかし、その時もうすでにサッカレーは病に苦しんでいた頃で、ディケンズは彼の様子があまりに変わったので、彼の身体を心配した程だった。サッカレーは亡くなる数日前にディケンズとクラブで和やかに話をしたが、それが二人が会った最後だった。サッカレーの葬式にはディケンズも参列し、サッカレーについての追悼文を雑誌に書いた。

人間の「親切、やさしさ」というのがディケンズの哲学の第一原理で、彼の道徳体系においてそれらが最大の価値を占めていて、彼の小説はロマンティックで理想主義的な傾向がある。彼ほど、不正に対して正直に怒りをぶつけることが出来る作家はいないと言われている。それは彼が人間というものを信じ、人々の慈愛によって、社会は良くなるという前向きな歴史観を持っていたからである。だからこそ、彼が起こす笑いにはとてつもない

ほどの明るさがある。一方、サツカレーは人間に対する皮肉が辛らつで、風刺が痛烈である。というのは、彼は人間を醒めた目で突き放して眺めたからである。彼の歴史観は社会を改革するというよりは、むしろ、過ぎ去った時を懐かしみ、いつくしむという後ろ向きの歴史観だった。彼らのその違いは明らかに二人の世の中に対するものの見方の違い、そして人間というものについての認識の違いから生じるのであろう。サツカレーもディケンズも本来ジャーナリストであつたが、その世相描写はかなり違ったものだった。ディケンズは身近な社会を観察

し、そこで見た悪弊を指摘し、それを矯正しようとした。それに対して、サツカレーは半ば、自嘲の気持も込めて、冷笑しながら、ぶざまな俗物の姿を正確に写し出したが、それを矯正しようとする意識はディケンズに比べて薄かった。ともあれ、ディケンズは庶民階級を描き、サツカレーは上流、中流階級を描くことで、二人の作品は欠けている部分を相互に補足し合っているので、彼らの作品を読み合わせると、ヴィクトリア時代のイギリス社会の見事なパノラマを見ることが出来る。